編集室

＊　新年号の特別小特集「超成熟社会発展のシナリオ」はいかがだっただろうか？　プランを作って 1 年以上，多くの方の協力で完成した．電子情報通信の未来を見る企画となり，協力された方々に深く感謝する．学会とは，コミュニティであり，全ての人がボランティアで働き，多くの人が自ら参加して，お互いに助け合いながら成長，進化させるところである．最近コミュニティについて考えたことがあるので述べたいと思う．

＊　先日，リナックスディストリビューションの一つであるオープンソフト，Ubuntu の開発コミュニティ生みの親とも言われている，Jono Bacon 氏の講演を聞く機会に恵まれた．これは，慶應義塾大学の大学院生のメンター（企業の人がほぼマンツーマンで，選ばれた学生のキャリアディベロップメントを指導して下さる制度）として来て頂いているソニーの上田理先生の御紹介だった．私も TED（Ideas worth spreading）を時々聞くので，北米の代表的企業リーダーのスピーチは普段からあこがれをもって聞くことが多く，実際に参加できる機会に恵まれたことを光栄に思った．いざ講演が始まると，いわゆる米国の代表的経営者の，圧倒するカリスマ性とは異なるオーラを感じることになった．その理由について，自分なりに考えたのでそれについて述べたい．

＊　講演会は，夕方 17：00 から三田，矢上，SFC，鶴岡キャンパスをバーチャル教育システムを通して，日吉で行われた．上田さんの強い希望で参加者は「これからグローバルでオープンな人々の連携を演出したり，そのような輪を構成するキーパーソンとなろうとしている人，特に，実際にそのような活動を始めている人」に限定し，あえて悪い言い方をすると，世界の有名なリーダーだからという「物見遊山」の参加希望者は断わられていた．自分はどちらかと言うと，いわば「物見遊山」メンバーだと思うが…．会場はというと，わざと比較的狭い 50 人収容程度の場所が選ばれていた．講演の内容は，コミュニティを作り，そこから規模を大きくしていくときのキーポイントを実例を挙げながら分かりやすく話してくれたものだった．具体的には Growth Strategy に始まり，Conflict や Governance 等である．少し理解するには難しいかもしれないが，Trust の作り方や，Ubuntu という組織構造と個人の心の中での成長，つまり自分のアイデンティティを見つけて，最終的には kudos（名誉）とも言うべき満足感を得るまでにはどうしたらいいのか，という内容であった．私の英語力では理解が不十分な箇所もあると思うが，まさに目からうろこのスピーチであった．これは，Ubuntu といういわばボランティアで構成された集団の中のコミュニティが，雇用や給与といったことだけにこだわるのではなく，会社の成功とともに個人も成長していく，ちょうど小学校の野球のコーチが子供たちと共に頑張り，自身も進化していく姿のように感じたのは自分だけだろうか？　講演は 1 時間程度であったが，日頃，私の授業ではめったに質問なんかしたことがない学生が，質問時間だけで 1 時間半を過ぎても終わることなく質問をしていた．「リーダーシップとは？」「仕事をしていてよかったことは？」「つらい場面は？」「何がモティベーションなのか？」…．つまりこれら全ては，コミュニティ（学会も同じ）を作り，成長させることへの大きなヒントとなった．

＊　この講演で私は，米国はカリスマ経営者が，パフォーマンスが上がらない社員を首にしながら，エリートをとんでもない高給で雇い入れて成功につなげることとは違い，オープンソフト，コミュニティという形でチームを作り，それがとてつもないパワーを生む，ということが理解できた．今まで私は「日本はチームワークの強い国でありそれが強みである」という認識を持っていたが，それはこの講演を聞いて改めさせられた．以前，中国系米国人の友人から「日本は理想的だ．ひとこと言っただけでみんな協力するチームワークがある．人の idea を大切にして，お互いに尊重し合う．米国は競争が美徳化しているから，いい idea を話すのはちょっと躊躇するよ．」と言われたこともあって，「日本はチームワークが強い国」と思い込んでいた．しかしこれは，言い換えると「日本は言われたことが間違っていても，失敗しそうでも，自分の考えと違ってもチームを作る国」という風にもとれるのである．つまり，日本人は自己を持たない，ということである．Jono 氏は，言いたいだけ言いたいことを言い合って，議論して，迷って，苦しんで，みんなでベクトルを作っていくことをコミュニティと言っていると理解した．正しいことは，そう簡単には見つからず，多様な考えをぶつけ，idea を出して進んでいくには，「個」が重要になってくるということであろう．

＊　以前この編集室に，日本の小学校では人と違うことを嫌い，みんなステレオタイプの能力のある「yes マン」を作ってしまうと警告の記事を書いた．一方，慶應義塾の SFC は「桃源郷」のような教育システムの中で，個性あふれる人材を育てている．簡単に言うと，必習は，英語と IT リテラシーのみで，それ以外は教員と相談しながら，バイキングのように個々に必要な授業を選択して，自分の皿に盛る，つまり「自分をデザイン」していく教育システムである．1，2 年生からゼミやプロジェクト型教育を取り入れ，自ら目的とプランを作る．そのためよく考えている子が成長する．もちろん，バイキングでデザートばかり食べる子がいるように，中身の薄い学生が出るネガティブな側面も否めない．企業からは「使いにくい」という言葉を頂くこともあると聞く．それらのことを鑑みると，そろそろ分かってこないだろうか．我々が積極的に進んで取り入れるべきは，多様化の許容であることが．多少の失敗や，やりにくさはあるが，もっと自由闊達に進化することを，学会も許容すべき時期にきている．国全体がオーバコンプライアンスになり，失敗を絶対に避けるために，必要以上に品質を上げることに時間を使い，決断できない状況になってはいないだろうか．失敗すると，ワイドショーでは繰り返し，繰り返し結果論としての対応の悪さを批判し，結局何もしないことしか選択をできない状況に追い込んではいないだろうか．

＊　コミュニティは最大の武器であると思う．電子情報通信学会は，この領域の最高のコミュニティで，私も私のところの学生たちも，研究会に行って厳しく指摘されたり，時には温泉に泊まってほかの企業の人とゆっくりと有意義な話をしたり，そしてそれらをばねとして今度は国際会議に行き，そこで失敗したら，更に勉強に取り組む日々を過ごしている．私も，あと半年の任期となってしまったが，希望してなった編集理事である．不十分であるが，少しでも良くするために全力で取り組みたい．　　（編集理事　山中直明）